

ART KISS

LETTER

Vol. 65
2014 新春



上通アートプロジェクト
「上通のうわさ」を設置中の山本耕一郎さん

巻頭言

アール・ブリュット — 創造の泉

第二次世界大戦後、フランスの画家ジャン・デュビュッフエによりアール・ブリュット（粗野派）の概念は構築され、彼の5千点に及ぶコレクションは、紆余曲折の末に、スイスの都市ローザンヌに寄贈されました。そして1976年、18世紀の貴族の館が、今までに例を見ない新しい美術館「アール・ブリュット・コレクション」として出発したのです。デュビュッフエは、友人の尖鋭な美術史家ミシェル・テヴォーに初代館長を委嘱します。テヴォーは、アール・ブリュットだけでなく、ベラスケス、シャルダン、セザンヌの斬新で洞察力にたけた論考を著しています。その後、テヴォーの跡を継いだのがリュシエンヌ・ペリー。そして現在館長を務めるサラ・ロンバルディも美術史家であるのが興味を引きます。つまり美術の歴史の大きな流れの中で、アール・ブリュットを考察し、高い評価を与え、それを言語化しているのです。

リュシエンヌ・ペリーには、「アール・ブリュット — アウトサイダー・アートの起源」という興味深いタイトルの本があります。世界の英語圏では、アール・ブリュットよりはアウトサイダー・アートが知名度が高く、しかも欧米現代史の中でアウトサイダーは、しばしば底知れない視野と想像力及び創造力をもつ者という高い評価を伴って語られます。

ところで昨年暮れ死去したコリン・ウィルソンは、1956年、わずか25歳で評論集「アウトサイダー」を出版、それは世界的なベストセラーとなりました。そのなかでウィルソンは、アウトサイダーを「変装した預言者」であると象徴的に語っています。

全国を巡回したこの「アール・ブリュット・ジャポネ」展は、熊本市現代美術館でフィナーレを迎えますが、見るたびに既成の知識や価値基準を超えて、新たな発見があり、深い感動をもたらします。デュビュッフエが語るように、アール・ブリュットは、正に新たな価値が見出された芸術領域であるのです。

熊本市現代美術館館長 桜井武

アール・ブリュット・ジャポネ展
2013年12月7日[土] — 2014年2月23日[日]

<http://www.camk.or.jp>

MUSEUM INFORMATION

2013 OCT - DEC

CAMKEESの活動

美術館ボランティア
CAMKEES(キャンキース)による活動紹介

福岡アジア美術館 ボランティアとの交流会

2013.10.20



福岡アジア美術館ボランティアの方々、「Welcome to the Jungle」展鑑賞と、当館ボランティアCAMKEESのみなさんとの交流会に來られました。

展覧会では、当館学芸員の解説を聞き、熱心に鑑賞されていました。福岡アジア美術館所蔵作品展示では、みなさんのご存じの作品を前に、当館スタッフに解説をしてくださる場面もありました。鑑賞を終え、CAMKEESのみなさんとカフェで交流会が行われました。福岡アジア美術館と当館のボランティア活動の紹介が双方で行われ、それぞれの活動の特色などを知ることができました。類似するものもあれば、そういうことも行っているのかと勉強になる活動もありました。県を超えて交流が生まれ、とても有意義な時間となりました。(N・H)

CAMKEES ボランティア研修旅行

2013.10.22

当館のボランティア(CAMKEES)の皆様と一緒に、研修旅行に行ってきました！今年は、県内の美術館2ヶ所と、津奈木町のアートプロジェクト「赤崎水曜日郵便局」の拠点となる旧赤崎小学校を見学しました。バスの移動中は、レクレーションを行い、行き先の展覧会について調べたことをボラ

ンティアさんが発表して下さいました。

一つ目の目的地は、葦北郡にあるつなぎ美術館。浅井裕介さん、クワクボリヨウタさん、下道基行さん、3名のアーティストの作品が展示された「二年目の消息」展を、学芸員の楠本さんに解説案内をしていただきながら楽しく鑑賞しました。午後は、海の上の小学校で知られている旧赤崎小学校へ。ここでは、自身の水曜日の出来事を専用の便箋に書いて送ると、他の誰かの手紙が届くという、参加型アートプロジェクト「赤崎水曜日郵便局」の手作りポストが設置されています。ボランティアさんと一緒に手紙を投函した後は、校庭や浜辺を散策。この日は、天気にも恵まれ、海がとてもきれいでした。



ツアーの最後は、宇城市にある不知火美術館で「塔本シスコ」展を鑑賞。館長の正村さんが作品1点1点を丁寧に解説してくださり、とても充実した時間を過ごしました。旅行から帰った後も、ボランティアさんから旅行の感想を様々に聞かせていただき、心に残る研修となったようです。(Y・M)

CAMK「読みがたり」第50回 テーマ「ハロウィン」

2013.10.26

絵本では「パンプキン」や「まちのクウモリ」を紹介しました。絵本に登場する挿絵には、オレンジ・黒・紫色といったハロウィンならではの色が並びました。ちよっ

月曜ロードショー上映報告

毎週月曜日14時・18時より 無料

上映リスト(10/21 ~ 12/16)

10月21日	「青い麦」1953年	フランス映画	104分
10月28日	「終わらない愛を探して」1983年	香港映画	95分
11月4日	「バグダット・カフェ」1987年	ドイツ映画	104分
11月11日	「家で死ぬということ」2012年	NHK放送作品	88分 *日本語字幕付き
11月18日	「マッハ!」2003年	タイ映画	108分
11月25日	「恋はハッケヨイ!」2000年	イギリス映画	120分
12月2日	「岩窟の野獣」1939年	イギリス映画	93分
12月9日	「スカートの翼ひろげて」1997年	イギリス映画	111分
12月16日	「グッバイ、レニーン!」2003年	ドイツ映画	117分

と怖い夜の色、でも町の明かりが優しく光っている。そんな物語の世界に子ども達はどんどん惹きこまれていました。手遊び「ミッキーマウス」や「アンパンマン」では、グー・パー・チョコから大人気のキャラクターが飛び出し、子ども達も大喜びでした。とても楽しいハロウィンの会となりました。(N・H)



【参加人数23人】

CAMK「読みがたり」第51回 テーマ「実りの秋」

2013.11.16



手あそび「あたまたかたひざポン」から元氣よく始まり、「さわさわもみじ」、「どんぐりころちゃん」などをご紹介しました。

「べったん！サンドイッチ」では、絵本の中であかちゃんのはっぱをべったんとすると、自分のほっぺたも両手でべったんとしてみたり、「こぶた・たぬき・きつね・ねこ」はペーパーサートという紙人形劇で、

CAMK「読みがたり」第52回 テーマ「クリスマス」

2013.12.21



絵本「サンタのおまじない」や紙芝居「サンタサンタサンタ」など、クリスマスらしいお話をご紹介しました。

手遊び「ぶたさんの変身」では、みんなでブタの鼻のマネをして、両手を使ってうさぎや象に変身。最後に「うそ、うそ」と手を左右に振って楽しみました。

エプロンシアター「まるさんかくしかく」では、丸、三角、四角の形から連想するものを言い合って、色々なものが登場しました。三角形が重なってクリスマスツリーになったり、四角形がケーキだったり、クリスマスをたくさん感じる会となりました。(N・H)

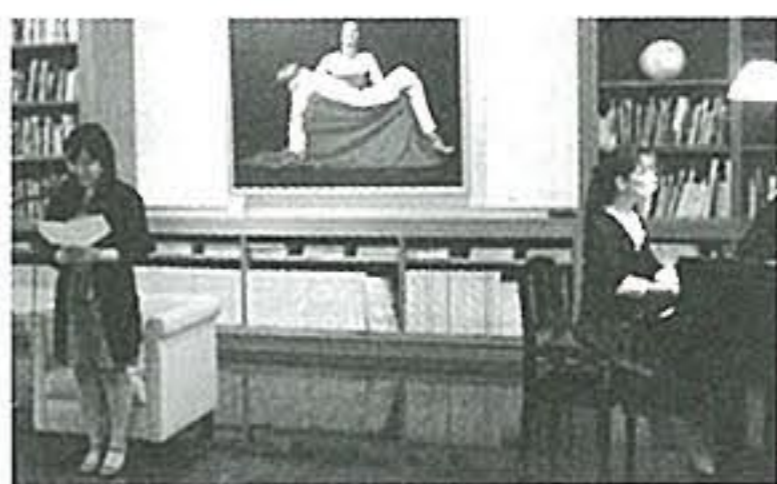
【参加人数12人】

詩の朗読会

くまもと詩の朗読の会共催の
自作の詩の朗読会です

テーマ「船」

2013.10.24



第119回のテーマは「船(舟)」。飛び入りの方2名を含んだ15名の発表でした。

昨年引き続き、1年に1度の特別バージョンで、2名ずつ、ギターとのコラボと、ピアノとのコラボがありました。ピアノとのコラボは、当館で夜7時から演奏をしてくださっている、ピアノボランティアさんのご協力をいただきました。音楽と朗読の声とが美しく溶け合う時間となりました。

「船」をテーマに、精霊船、難破船、柩の舟、船守などを詠う、死の影を感じる詩作がいくつか発表されました。また、笹船や、折り紙の「帆かけ船」など、子供と親しい距離にある舟を詠った作品もありました。他に、「眠くなって船を漕ぎ…」などと、あそこも船だ!と驚かされる表現もありました。(H・T)

【参加人数15人】

テーマ「ライオン」

2013.11.28

詩の朗読会も第120回を迎えました。テーマは、「ライオン」。「Welcome to the Jungle 熱々!東南アジアの現代美術」展にあわせてのテーマでした。(シンガポールつて、獅子の町という意味なんですよ)飛び入りを含む17名が詩作を発表しました。



イソップ物語をもとに詩を作られた方から、福島原発問題に関する詩まで、一つのテーマから自由な詩作の世界を表現していました。声の抑揚によつてまた違った世界を見せてくれる朗読会は、作者の声で詩の朗読を聞けることも楽しみの一つであるように思いました。(K・O)

【参加人数17人】

ミュージック・ウエーブ

展示会や季節にあわせた
コンサートを開催しています

ミュージックウエーブ072
STREET ART-PLEX KUMAMOTO協働事業
Great Composer Memorial
Series フレデリック・ショパン

2013.10.19



今年も熊本在住の演奏家のみなさんによる、ショパンの名曲の数々の演奏をお楽しみいただきました。ハンドベルのように数人で音を分担して奏でる「トーンチャイム」の演奏では、会場全体が優しい音色に包まれました。今年はゲストに、正源司有加さんをお迎えし、「ノクターン 第4番へ長調 op.15-1」、「ノクターン 第13番ハ短調 op.48-1」などの曲目と、アンコールを含め4曲を披露して下さいました。(Y・M)

【参加人数70人】

ミュージックウエーブ073
STREET ART-PLEX KUMAMOTO協働事業
EXTRAVAGANZA 2013

2013.10.19

「高杉稔 & 豊田隆博」と「高嶋宏・豊田隆博 Duo」の2組による演奏をお届けしました。

1組目は、シャンソン歌手・舞台俳優としても活動されている高杉稔さんと、ジャズピアニストの豊田隆博さんのコラボレーション。ボスニア紛争を題材とした自作の物語の朗読に合わせ、ピアノの即興演奏で表現されました。2組目の高嶋宏・豊田隆博 Duo では、ジャズのスタンダードナンバー「Fly Me to the Moon」[Autumn Leaves] やオリジナル曲を披露していただきました。ジャズギターの甘い音と、軽やかなピアノが印象的でした。(Y・M)

【参加人数90人】

ミュージックウエーブ074
アジアンホリデー くまもと関連イベント
東南アジアコンサート

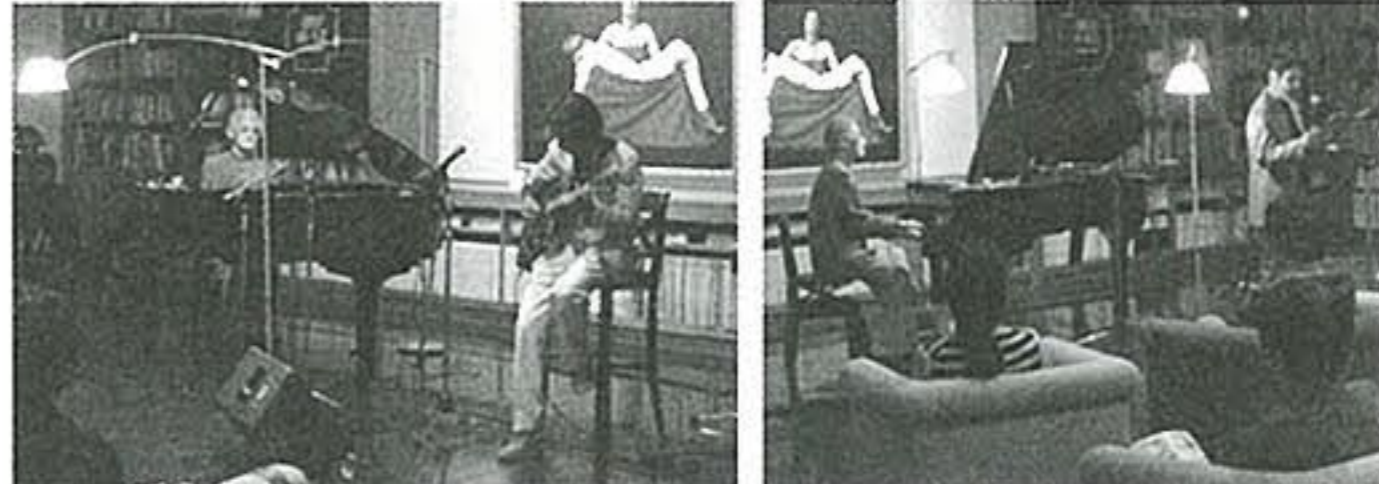
2013.10.19

「Welcome to the

Jungle 熱々!東南アジアの現代美術」展の開催にあわせ、ホームギャラリーにて「東南アジアコンサート」を行いました。熊本インドネシア友好協会に共催いただいたこのイベントには、ピアノとフルート2重奏のグループ



吉田秀晃 三浦デュオ・ドレミ」にご出演い



熊本朗読研究会による
朗読会

2013.12.14



熊本朗読研究会のみなさんによる、熊本ゆかりの作家の文学作品の朗読会が開催されました。八雲や漱石をはじめとする熊本に縁の深い著名作家5人の作品の中から、特に印象的な場面を選んで朗読していただきました。

西南戦争で熊本城の天守閣が焼け落ち、衝撃を受ける人々。こんにやく売りが担ぎ棒の重さを感じながら、今日の売れ行きに一喜一憂する様子。などなど、地元熊本を舞台にしたそれぞれのシーンが目の前にひろがるかのように感じられたひとときでした。(紹介作品:石牟礼道子「苦海浄土」、石光真清「城下の人」、小泉八雲「生と死の断片」、夏目漱石「道草」二百十日、徳永直「こんにやく売り」)(G・S)

【参加人数15人】

「Welcome to the Jungle 熱々〜東南アジアの現代美術展」
**ジュン・グエンハツシバ
 映像作品 特別上映**

2013.10.26&11.23

熊本で「全国豊かな海づくり大会」が始まった日に、ジュン・グエンハツシバが2002年に熊本で滞在制作した映像作品『Memorial Project Minamata: Neither Eiber nor Neither - A Love Story』を上映しました。2002年の6月と8月に作家が熊本で制作したもので、水俣と牛深の海で撮影されました。ハツシバの作品は、個人のアイデンティティや、人々が暮らす「場所」そのものがテーマとなっています。この作品では、水俣の歴史、記憶、そこに暮らす人々の営みが抒情性豊かにとらえられています。海の底でもがく人々は、歴史の表舞台には上がってこないかもしれませぬ。でも海底で必死に泳ぎ、皆と一緒に力を合わせて前進しようとしています。蚊帳の外で眠る女性は、当事者でありながら、その外でじっとしなければならぬ人々の姿にも重なります。



一方、展覧会では、作家が各地を走る姿がモニター6台によって映し出されています。この作家の移動はGPSで記録されています。各地を越境するかのよう移動し続ける姿は、難民の存在を連想させますが、その一方で、様々なしがらみから解放された自由な身のように感じられます。「海」そして「陸」と場所設定は違いますが、どちらも人々のアイデンティティと場所性を問う興味深い作品です。展覧会と上映会の両方を熱心に鑑賞されるお客様もいらっしゃいました。(A・A)

【参加人数各回15人】

「Welcome to the Jungle 熱々〜東南アジアの現代美術展」
特別講演会2

2013.10.27



展覧会の開催を記念して、日本におけるアジア近現代美術研究の第一人者、後小路雅弘氏による講演会を行いました。講演タイトルは「東南アジア美術というジャンルを歩くための10の道標」。本展のタイトルやコンセプト、展示作品を中心に構成して下さった、まさに特別講演会。講演会では、長年アジアでの調査をされる後小路氏ならではのアーティストに関する秘話、そして、東南アジア地域がもつ背景や美術史観について、豊富なスライドとともに、「宗教」、「国家」、「移民」、「越境」、「家族」、「経済発展」など10の道標という視点からお話くださいました。本展は、シンガポール美術館と福岡アジア美術館のコレクションから構成されていますが、後小路氏は、福岡アジア美術館の開館に携わり、学芸課長としてコレクションの収集も担われてきました。今回展示している福岡アジア美術館のコレクションについても、主題や様式、作家の意図、作品の見どころについてご紹介くださいました。また、最後には、ナウイン・ラワンチャイクンさんの近影も登場！当日は、福岡、長崎、大分など県外からも多くの方々においでいただき、熱心に聴講される姿が印象的でした。(A・A)

【参加人数50人】

「Welcome to the Jungle 熱々〜東南アジアの現代美術展」
アーティスト・トーク

2013.11.3

本展に映像作品《すべての川は海へ通じる》を出品しているチャールズ・リムによる、アーティスト・トークを開催しました。

リムは、シンガポール出身、在住のアーティストです。以前はセイリングの選手でシンガポール代表としてオリンピックにも出場したことがある異色の経歴の持ち主。彼は、セイリングというスポーツで海という大海原を舞台に水に親しみ、その後、ロンドンに渡って美術を学び、国外の離れた場所でシンガポールという国を見つめ直しました。そういった経験から、水に囲まれた島国シンガポールという視点によってシンガポールの現代社会が抱える問題を詩情豊かな作品として表しています。今回は、リムのこれまでの活動や、彼の制作テーマに加え、近作のシンガポールとマレーシアの海を漂流するユニークな作品《ドリフト》や、シンガポール国立大学美術館で現在開催中の個展「ラッフルズ ライト」についてシンガポールの国家政策の背景も交えてご紹介いただきました。(A・A)



【参加人数40人】

「Welcome to the Jungle 熱々〜東南アジアの現代美術展」
ナイトツアー

2013.11.7&9



展覧会会期中の恒例となったナイトツアー。このツアーは、美術館のお膝元である商店街のみなさんを対象に、お仕事の後に参加しやすい閉館後に開催する展覧会ツアーです。今回の展覧会テーマである東南アジアの地域は、その目覚ましい経済発展や人気観光地として名前を耳にする機会が多くなりましたが、戦後に独立や建国された新

しい国々ということもあって、まだまだ近くて遠い国々というのが実情かもしれませぬ。今回は、アートを通じて東南アジアに触れていただくことを主眼に、作品解説に加え、これまで各地域が歩んできた歴史や現代社会の問題を交えながらツアーを行いました。参加者の皆さんは熱心に耳を傾けられ、活発に意見や感想を述べ、質問をしてくださいました。なかでも、タイの画家、パンヤー・ウイチンタナサーンの8メートルにも及ぶ大型絵画作品の前では、その緻密さに感嘆された様子で、多くの方々から離れがたそうにしていた姿が印象的でした。(A・A)

【参加人数15人】

「Welcome to the Jungle 熱々〜東南アジアの現代美術展」
プレママ&ファミリーツアー

2013.11.9



「Welcome to the Jungle」展のプレママ&ファミリーツアーを行いました。今回の展覧会は東南アジアの歴史や政治的背景を描いた作品も多かったのですが、参加してくれたお友達は最後まで一緒にまわることができました。途中、リー・ウエンの「世界標準社会」の作品では、アンケートに答えて特製バッジもゲット！みんなが大きくなる頃、日本も前向きな意味での「世界標準」に近づいているといいなと思いつつ、ツアーを後にしました。(A・S)

【参加人数7人】

「上通のうわさ」は
100を超える店舗が
参加してくれたらいいよ!



「Welcome to the Jungle 熱々! 東南アジアの現代美術展」
CAMK
レクチャーカレッジ



【参加人数30人】
熊本市障がい保健福祉課の委託事業として行っている障がい者サポーター制度の発足式を記念して、日比野克彦さんの講演会が開催されました。川崎市岡本太郎美術館で開催された展覧会「Hibino on side off side」で制作した作品の映像を紹介しながら、海中で描くと

2013.11.17

障がい者サポーター制度
発足式記念講演会

本展の特質は、東南アジアの現代美術を収集、発信することで国際的に評価の高い二大美術館として知られる、国立のシンガポール美術館と福岡市のアジア美術館のコレクションによって構成されていることですが、レクチャーでは二つの美術館による二部構成のアレンジや展示テストについてもお話ししました。(A・A)

【参加人数30人】

2013.12.8

熊本市障がい保健福祉課の委託事業として行っている障がい者サポーター制度の発足式を記念して、日比野克彦さんの講演会が開催されました。川崎市岡本太郎美術館で開催された展覧会「Hibino on side off side」で制作した作品の映像を紹介しながら、海中で描くと



「上通のうわさ」プロジェクトの集大成ともいえる「上通のうわさ」では、上通や並木坂にある店舗や事業所を取材することで今までになかったコミュニケーションが生まれ、まちの人たちの「うわさ」がショーウィンドーや通りの柱に続々と登場し、笑顔と会話があふれる上通に変身しました。「通りでの滞留時間が長くなった」「知らなかったお店に入ってみようと思った」などの街ゆく人の感想も。

上通アートプロジェクト
「上通のうわさ」ファイナル



上通商業会、アーティストの山本耕一郎さん、熊本市現代美術館の協働事業として、今年4月から行ってきた上通アートプロジェクト第2弾「上通のうわさ」が12月にファイナルを迎えました。「うわさバッジ」「うわさ神社」「うわさうちわ」と続いていた「うわさプロジェクト」の集大成ともいえる「上通のうわさ」では、上通や並木坂にある店舗や事業所を取材することで今までになかったコミュニケーションが生まれ、まちの人たちの「うわさ」がショーウィンドーや通りの柱に続々と登場し、笑顔と会話があふれる上通に変身しました。「通りでの滞留時間が長くなった」「知らなかったお店に入ってみようと思った」などの街ゆく人の感想も。

【参加人数150人】

2013.12.8

「上通のうわさ」プロジェクトの集大成ともいえる「上通のうわさ」では、上通や並木坂にある店舗や事業所を取材することで今までになかったコミュニケーションが生まれ、まちの人たちの「うわさ」がショーウィンドーや通りの柱に続々と登場し、笑顔と会話があふれる上通に変身しました。「通りでの滞留時間が長くなった」「知らなかったお店に入ってみようと思った」などの街ゆく人の感想も。

「オール・プリユット・ジャポネ」展
オーブニングコンサート

「オール・プリユット・ジャポネ」展
オーブニングコンサート

「オール・プリユット・ジャポネ」展開幕を記念して、JOY倶楽部ミュージックアンサンブルの皆さんによる、オーブニングコンサートを開催しました。出演者の皆さんは、福岡市博多区にある障害福祉サービス事業所JOY倶楽部の音楽部門に所属し活動されています。当日は、南国の曲からクリスマスソング、JOYクラブオリジナル曲まで、計8曲を演奏して下さいました。音楽に加えてきれいなダンスも披露され、会場からは自然と拍手が！メンバーの方々やオーディエンスの皆さんが一体となって楽しむ、賑やかでアットホームなコンサートとなりました。(A・A)



2013.12.7

「オール・プリユット・ジャポネ」展
レクチャーカレッジ

「オール・プリユット・ジャポネ」展
レクチャーカレッジ

【参加人数60人】

2013.12.15

「オール・プリユット・ジャポネ」展開幕を記念して、JOY倶楽部ミュージックアンサンブルの皆さんによる、オーブニングコンサートを開催しました。出演者の皆さんは、福岡市博多区にある障害福祉サービス事業所JOY倶楽部の音楽部門に所属し活動されています。当日は、南国の曲からクリスマスソング、JOYクラブオリジナル曲まで、計8曲を演奏して下さいました。音楽に加えてきれいなダンスも披露され、会場からは自然と拍手が！メンバーの方々やオーディエンスの皆さんが一体となって楽しむ、賑やかでアットホームなコンサートとなりました。(A・A)

「鉄魂ブギ」展
街なかアート・ウォーク

G III
「鉄魂ブギ」展
街なかアート・ウォーク

ギャラリーIII(G III)は、熊本、九州のアーティストを紹介し、応援していくスペースです

「鉄魂ブギ」藤本高廣のくず鉄魂展の関連イベントとして、街なかのズベ作品のアート・ウォークを行いました。遠く鹿児島からもたくさんのお客様がみえて、にぎやかにスタート。上通のグリル・ド・ギャン、ドラゴ・プロカント、アラモート、コーナーズ、壱之倉庫、武の式など、角を曲がればズベさんの作品がある状態。印象的だったのは、お店の方、街ゆく方々がどんだん声をかけられてきて、作品がすっかり町の風景になっていくことでした。最後はギャラリーIII会場にゴール。秋の爽やかな1日、笑いの絶えない楽しいアート・ウォークになりました。(A・S)



2013.10.19

「鉄魂ブギ」藤本高廣のくず鉄魂展の関連イベントとして、街なかのズベ作品のアート・ウォークを行いました。遠く鹿児島からもたくさんのお客様がみえて、にぎやかにスタート。上通のグリル・ド・ギャン、ドラゴ・プロカント、アラモート、コーナーズ、壱之倉庫、武の式など、角を曲がればズベさんの作品がある状態。印象的だったのは、お店の方、街ゆく方々がどんだん声をかけられてきて、作品がすっかり町の風景になっていくことでした。最後はギャラリーIII会場にゴール。秋の爽やかな1日、笑いの絶えない楽しいアート・ウォークになりました。(A・S)

【参加人数30人】

MUSEUM INFORMATION

GIII vol.95 熊本市現代美術館
コレクション展開かれゆく境界

2013.12.14-
2014.2.2

当館コレクションによる「開かれゆく境界」展がギャラリーIIIで開催中です。余人をよせつけない密やかな世界を



描いた作品から、国の境を越えていくような作品、また区別が作られる過程を批判的にとらえた作品まで、自己と他者の間の「境界」をテーマに、コレクション作品計6点を展示しています。示唆に富むそれぞれの作品を前に、「自己と他者」「自分と世界」の関わり方について何かを感じていただければと思います。(G・S)

いのちの花壇植え替え

2013.11.19

熊本支援学校の農芸班の皆さん9名による、命の花壇の植え替え作業が行われました。今回は植え替えに合わせて、水栓工事も行われ、より水やりがスムーズになりスタッフも嬉しい限り。今回は、パンジー、ビオラ、葉牡丹が植えられました。寒風の中、きれいなお花が育つことを楽しみにしています！(A・S)



井手宣通記念室「冬のテーマ展示・窓のある景色」

2013.12.1-
2014.2.11

「窓のある景色」をテーマに作品をご紹介します。今回の出品作品のほとんどが収蔵後初公開。井手宣通、熊谷有展、淵田安子、田淵安一、田代順七、宇野千里による、それぞれの窓のある景色をお楽しみください。



日比野克彦《GRAND PIANO》は、それらの作品の持つ親密で優しい雰囲気を感じさせ、寒さが続くような存在。寒い日が続きますが、ほっと心が安らぐような空間を目指して作品展示を行います。ぜひお立ち寄りください。(H・T)

編集後記



「アール・ブリュット・ジャポネ」展の展示作業の際、ひとつひとつの作品に触れたのちに心に残ったのは、立体作品の重さについてでした。八島孝一のおブジェ作品は、まるで握り寿司一貫のように軽やかで、繊細ながら安定しており、指先での運びやすさを持っていました。西本政敏の木製の作品群は、車輪その他が動く構造を持つゆえ程よく動かしやすい重さでした。上里浩也の紙製作品であるジャンボジェット機は本体にみっちり紙が詰め込まれ、見た目とそぐわぬかなりの重量感がありました。いずれも作家それぞれの手の好みにあった重さで作られた作品であり、その重さにも作家の意図を感じました。ぜひ鑑賞の時に、それぞれの作品の重さも想像してみてくださいね。

編集長 富澤治子

VOL.18

「カレーライスの誕生」



著者:小菅桂子
出版:講談社選書メチエ
2002年

ホームギャラリーからおすすめの一冊をご紹介します。

カレーライスは、カレーの本場インドからイギリスを経由して日本に入ってきましたが、本場のインド人が日本のカレーを食べて「この料理は何ですか?」と言ったとか。今や代表的「日本食」となったカレー

ライスの歴史をまとめた本を紹介いたします。

日本人で最初にカレーを食べたのは、会津藩の山川健次郎。明治3年に留学生としてアメリカへ渡る船の中でした。ただし、この頃のカレーは現在のレシピとは異なっていました。殺生禁断令の解禁、西洋野菜の輸入、北海道での大量栽培を経て、カレーライスの「三種の神器」タマネギ・ニンジン・ジャガイモが揃うのが明治時代の終わり頃になります。

また、カレーライスのベストコンビである福神漬は明治19年に販売されますが、その当時はカレーに塩味が足りなかったため、カレーにウニをトッピングすることもあると。また、カレーライスのベストコンビである福神漬は明治19年に販売されますが、その当時はカレーに塩味が足りなかったため、カレーにウニをトッピングすることもあると。また、カレーライスのベストコンビである福神漬は明治19年に販売されますが、その当時はカレーに塩味が足りなかったため、カレーにウニをトッピングすることもあると。

大正時代になり、カレーは、東京では西洋料理の専門店が高級料理として、大阪で

は阪急百貨店で大衆料理として少しずつ、日本に広まってきました。

この頃のカレー粉は、イギリス産産品でしたが、昭和の時代になると国内生産に成功、カレーが更に日本国中に広まってきました。しかし、太平洋戦争前にカレー粉の製造と販売は軍用食に限るとされ、カレーは一般国民から離れてしまいました。

昭和25年、約10年の空白の期間を経て、カレーが再び国民の前に現れます。その後、カレールー・インスタントカレーの誕生、学校給食への採用により、カレーは「日本食」となっていくのであります。

カレーが日本で誕生して以来、様々な人が研究を重ねて、外国の食べ物日本人向けにアレンジすることにより、日本人の心を掴む過程をこの本が教えてくれます。この本を読んで、新たなオリジナルカレーを作ってみませんか?(I・S)

2013年のCAMKは、一年中「うわさ」であふれました。表紙で登場したアーティスト山本耕一郎さんの「うわさプロジェクト」。上通や美術館内でオレンジ色の吹き出しを目にされた方もいらっしゃると思います。うわさプロジェクト、うわさみくじ、うわさうちわ、街のうわさ...それぞれのプロジェクトを通じて、たくさんのお出逢いがありました。同じ地域にいながら普段交わらない人たちが交わっていくことが、とても楽しく、発見の連続でした。これも山本さんがつないでくれた交流だなと感じています。そんな出会いが生まれる場所にCAMKもなれたらと思います。2014年もCAMKをどうぞよろしくお申し込み申し上げます。

担当 濱川倫子

Visitor's letter

来館者のみなさんからのメッセージ

アンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介します

「Welcome to the Jungle」展

- ・アジアの熱気を感じた(熊本市・30代・男性)
- ・戦争に関する作品があり、平和への重みを感じました。(熊本市・50代・男性)

「アール・ブリュット・ジャポネ」展

- ・久しぶりに心を揺さぶられる作品に出会いました。(熊本市・30代・女性)
- ・独特な作品があり楽しかった。(熊本県・10代・女性)

【執筆後記】*原稿の文末にイニシャル表記

兼城昌山(書道家)(S.K)

藏座江美(熊本市現代美術館主任学芸員)(E.Z)

富澤治子(熊本市現代美術館主任学芸員)(H.T)

坂本顕子(熊本市現代美術館主任学芸員)(A.S)

芦田彩葵(熊本市現代美術館主任学芸員)(A.A)

佐々木玄太郎(熊本市現代美術館学芸員)(G.S)

濱川倫子(熊本市現代美術館学芸員)(N.H)

丸吉ゆかり(熊本市現代美術館学芸員)(Y.M)

平原奈津美(熊本市現代美術館学芸員)(N.H)

大田黒翔代(熊本市現代美術館学芸員)(K.O)

杉谷和泉(熊本市現代美術館総務主査)(I.S)

ART KISS LETTER アートキッスレター

vol.65新春号(2014年1月)【無料】

発行人:桜井武

編集:富澤治子 濱川倫子

デザイン:石井克昌(MOTOSHIKI)

印刷:シモダ印刷

発行:熊本市現代美術館

860・0845

熊本市中央区上通町2-3

電話 096・278・7500

ファクス 096・359・7892

http://www.camk.or.jp/

【次号は春号(3月発行予定)】

ART DE GYAN

アート・どぎやん。

※熊本弁でアートはどぎやん？という意味です

太田宏介 「熊本初絵画展」

画廊喫茶三点鐘

熊本市中央区手取本町3・8

TEL 096・326・3040



2011年に当館のGⅢで開催した「工房まる作品展」にも出品いただいた、太田宏介さんの熊本初の個展。

2年前の作品と同じようなビビッドな色使いはそのままに、よりダイナミックさを増した作品が多く、特に動物を描いた作品は躍動感が感じられ圧倒された。一筆箋やタンブラーなどのグッズも販売されており、デザイン性の高さもうかがえた。(E・Z)

こみねゆら

「絵本原画展」

ギャラリーカフェアーク

熊本市中央区上通町5・46

TEL 096・352・3000

2013.12.10-15

2013.11.11-20



熊本出身の絵本画家こみねゆらさんの原画展。1992年の初出版以来、精力的に活動を行っているこみねさんの新刊「花びら姫とねこ魔女」の原画や、江國香織の小説の挿絵など60点が展示。絵本のモチーフとなったぬいぐるみと原画の展示は絵本好きにはたまらない空間となっていた。絵本から飛び出したような作家自身の手作りによる小さな人形まで展示され、こみねさんの世界観が随所に見られる展示会となっていた。(E・Z)

グループジェイ作品展 (油彩・水彩)

画廊喫茶 ジェイ

熊本市中央区大江本町6・9

TEL 096・372・8732

2013.12.11-28

画廊喫茶ジェイに集う絵画好きの人々によるグループ展。メンバーは30〜70代と幅広く、毎年2回開催している。今回は、水彩画と油彩画約10数点が展示され、アマチュア絵画展において団体で準優勝した作品や、水彩画展に出品した際の作品などが並んでいた。江津湖沿いの風景を描いた作品には、何気ない風景の中に日々の安らぎを感じられ、どの作品



からもそれぞれが日常を心豊かに過ごしている様子が感じられた。コーヒーの香る店内で、想いを込めた作品に囲まれながら贅沢な時間を過ごした。(K・O)

第54回熊日書道展

熊本県立美術館・本館

熊本市中央区二の丸2

TEL 096・352・2111

2013.12.17-23



熊本県下では最高、最大の書道展であるといわれている熊日書道展には412点の応募があり、198点の入賞、入選者があった。グランプリの熊日賞は、黒岩健人さん(御船町出身)の漢字作品。18才の大学生である。行草書でタッチのきいた筆使いのうまさ、行間の生かし方など若いのに見事である。熊本県知事賞は、高木武子さん(玉名市)のかな作品。用筆が、漢字をかくような力強い線でダイナミックさがあり、生き生きとしたリズムカルな線のながれが、さえていた。熊本市賞は塚刻で、高井慧舟さん(荒尾市)である。印の太い細いをうまく生かした線の変化のあるユニークな作品となっていた。会場全体としても斬新さと工夫された努力作が入賞者に多く見られた。日展会員の岡野屋さん(漢字)、土橋靖子さん(かな)によって審査された。(S・K)

nakaban 個展 「とんだりはねたり」

2013.12.20
-2014.1.18

さかむら

熊本市中央区南千反畑町5・15

TEL 090・9397・6501



画家、nakabanさんの新作個展。油絵や木彫が二十点ほど展示されていた。ポルトガルが好きでよく訪れているので、タイトルもポルトガル語である。ポルトガルの街並みや静物画など、一つ一つ物語を含んでいるような世界があった。新市街のカフェ「Orange」でもnakabanさんの展示を合同開催していた。また、「さかむら」のオーナー坂村岳志さんは花人で一年半前に熊本市内にある茶室が気に入って、東京から移住してきたそう。店内には骨董品や坂村さんの生けた花も飾ってあり、とても雰囲気のある場所であった。(N・H)

市山くじらや うつつわ展 vol.3

2013.12.17-23

熊本伝統工芸館 2階展示室B

熊本市中央区千葉城町3・35

TEL 096・324・4930

天草市五和町に工房を持つ、市山くじらやの器の展示が行われた。熊本県伝統工芸館での展示は、今年で3回目となる。定番の白地に黒色のドットやチェックの模様が入った器に加え、クリスマスリースや正月飾りを思わせる新作を含めた約

300点が集められた。淡いブルーやグレーでまとめられた器たちは、定番と同じドット柄のものでもガラリと雰囲気が異なる。(Y・M)



SOJJOビエンナーレ 2013(後期)

2013.12.21-29

崇城大学ギャラリー

熊本県熊本市花畑町10・25

TEL 096・323・1158



九州各県と沖縄の高校生の若い感性・才能を援助・育成し、新しいデザインの創造と発信の場を作り上げる目的としてスタートした九州・高校生SOJJOビエンナーレは、今回で10年目を迎える。今年は、デザイン・絵画ともに丁寧に細部まで描き込んだ作品が多く、画面いっぱいに広がる制作の勢いに高校生の若い力を感じた。平面作品の多い中、目を引いたのは、崇城大学賞に輝いた藤吉俊介さんの「メカマキリ」という立体作品だ。パソコンの起動スイッチや針金、網、機械の部品などの素材を組み合わせたカマキリとバッタを造形したもの。獲物を捕らえる一瞬のカマキリのイメージを、鋭くカッティングされた金属の素材がストリートに伝える。(K・O)

ス イ ト ヲ ヲ ・ ク マ モ ト

SUITOTTO KUMAMOTO

熊本の文化を支える人々をご紹介します。

熊本市現代美術館で毎週月曜日に開催している「月曜ロードショー」では、聴覚障害者の方にも日本映画を楽しんでいただくために、年に3本程度、日本語字幕付きで上映しています。今回はその字幕制作を手がけていらっしゃる字幕制作ボランティア「おむすび」の、開設当初からのメンバーである水民喜代さんに、日本語字幕についてお話していただきました。(前編は64号に掲載)

字幕制作ボランティア「おむすび」 水民喜代さん 〈後編〉



「おむすび」のメンバーと
(後列右:水民喜代さん)

続いて、実際の映像を見てもらいます。これは熊本の歴史の検定を行う時の宣伝用番組です。加藤家、細川家まつわるクイズが出されるのですが、一般の方でもあまり知らないような内容もあったので興味深い番組でした。聞こえない方に観てもらったら、熊本の歴史を知ることが出来て良かったと言われました。聞こえない方にはちょっと難しかったかもしれませんが、どちらかというと歴史好きの方のための番組ですね。

実際の字幕を見て、何か違和感というか気づいたことがありますか？洋画の日本語字幕とは違うんですよ。そうですね、字幕に色が使われていましたね。あれはなぜか。黄色い文字がありました。司会者の声を黄色にしました。なぜかという、司会者の顔が映っていないときにも声が聞こえてくるんですね。いちいち名前をつけて出そうかと思ったんですが、それでもわかりにくくなるので、色分けしました。色つきの字幕を最初1、2回見てもらうと、字幕に慣れている聞こえない人にはわかってもらえます。以前は最初に説明を入れていたんですが、最近はあまり入れなくなりました。

字幕放送のドラマも、主人公が黄色で副主演が水色になっています。色がついていけば特定の人の人なんだな、とだいたい見当をつけてもらえるからです。

あと、字幕の位置が動いていたと思います。こちら側にいた人、あちら側にいた人というように。ある程度動かして、誰が言っているのかをわかるようにしています。

それと、音の説明があつたと思います。笑い声とか拍手とか。顔が見えていけばつけなくてもいいんですけど、見えなくてもいいようにしているんですけど、見えなくてもいいようにしたり、わーと盛り上がりつつあるのは、映像だけだと分かりづらいんですよ。それで、その場の雰囲気を出すための工夫をしています。表情だけでわかる時もあるんですけど、何もないと楽しさが伝わらないので、あとから付け加えました。

こういう感じでいろんな工夫をしています。文字数も縮めています。しゃべっているスピードが早いというのもあるんですけど、全体の映像を見やすくするための文字数の限界というのがあります。洋画に字幕をつける場合も1秒4字のルールがあるそうなんです、私たちも要約するときの目安として1秒4字をやっています。ひらがな、カタカナであつても4文字です。また、ルビも多かったです。小学生じゃないのに、と思われるかもしれませんが、ちょっと難しい言葉の時だけなくて、読みがどちらか迷う時があるんですよ。「町(まち)」だったり「町(ちやう)」だったり。そういった「迷うかな？」と思う時にはルビを振っています。私たちは耳で覚える部分もありますが、「新外(しんぽか)」という地名をろう者と話す「新外(しんそと)」と読んでいたりします。地名は独特のものがあるので、熊本の人もわかりにくいかなという地名には、ルビを振ります。ほかにももっと細かいこともあるんですけど、聞こえない方に向けて作る字幕というのはこのようないろんな工夫をしています。

今まで字幕を作ってきましたが、聞こえない方向けの字幕をどうするかというのが一般には知れ渡っていないんです。

今は字幕放送が増えてきているのですが、

あれはほとんど要約されていないんですね。だから聴覚障害者に聞くと、バラエティはあまり楽しめない人もいます。同時に複数の人がしゃべったりしますので、字幕が変わるのが早くよくわからない、あまりおもしろくない、と言う人もいます。聞こえる人でもたまに字幕を観る人にはいいんですが…。

たとえば私が、岩手の言葉がわからないから字幕をつけてみる、というくらいならいいんですけど、音を消してみたら、バラエティの字幕はわかりにくいなと思います。ましてテンポの速い番組だったりすると難しいと思います。だから聞こえない人向けにどうするかというの、まだまだ字幕放送もつかみ切れていないところがあります。

要望として上がっているのは、「要約しないでほしい」というのはあるんです。「言ったとおりに出してほしい」と。それは聞こえない方の本心だと思えます。今まで自分たちが得られなかったものを全部得たいというお気持ちですよ。ただそれが実際見たときに楽しめるかというと、かなりの努力が必要になってくるんじゃないかと思えます。皆さんもテレビの音を消して字幕を見てみてください。何分もつかないかと思えます。私も5、6分しかもたなかった。音がある環境に慣れすぎているというのもあるんですけど、音を消して忙しい字幕をずっと見るのはつらいと思えます。

聴覚障害者の字幕制作の専門性ということをもっと知っていただきたいなと思います。もうひとつは、字幕制作をする人の養成も必要です。字幕サークルおむすびのみならず、今日の映画の字幕を作ってくださいというんですけど、慣れるまで、4、10年くらいかかっています。もう少し効率よく養成することが必要かなと考えています。

平成25年8月19日(月)に学芸員実習生を対象とした講義内容からの抜粋。(編集:E-Z)

次回の
展覧会
第25回熊本市美術展
熊本アートパレード
2014年3月8日(土)～3月23日(日)

【作品募集】すべての出品作品を当館で展示します！

15歳以上(中学生を除く)の熊本市在住・在学・在勤・熊本市出身者は、どなたでも無審査で作品を出品することができます。応募要項は熊本市現代美術館・熊本市役所・各区役所・各出張所などに設置してあります。当館ホームページからもダウンロードできます。

作品受付 2014年3月1日(土)・2日(日) [2日間] 10:00～17:00
日時・場所 熊本市現代美術館 ギャラリーI

審査員 原田マハ (小説家、キュレーター)

1962年東京都生まれ。関西学院大学文学部日本文学科、早稲田大学第二文学部美術史科卒業。マリムラ美術館、伊藤忠商事株式会社、森美術館設立準備室、ニューヨーク近代美術館勤務を経て、2002年よりフリーのキュレーター、カルチャーライターとして国内外の展覧会やアートコーディネートを手がける。2005年「カフェを待ちわびて」で第一回日本ラブストーリー大賞受賞。2012年「楽園のカンヴァス」で第二十五回山本周五郎賞受賞。著作は「一分間だけ」「さいはての彼女」「キネマの神様」など多数。アート小説「ジヴェルニーの食卓」は第149回直木賞候補となる。



原田マハさんからのテーマ：光

©合田昌弘